

港区立郷土歴史館

## 歴史館だより

## 国産最初期のグランドピアノ 修理への序章

野口 朋子  
(学芸員)

令和5（2023）年1月、当館の見どころが一つ増えました。2階コミュニケーションルーム横の旧図書館長室に設置されたグランドピアノです。このピアノについては『歴史館だより』vol.14-1で令和4年度の港区指定文化財に指定された旨をご紹介しましたが、適切な環境でより多くの方々にご覧いただくことと、今後の修理について検討することを目的とし、約90年間所在した赤坂の地を離れ当館へ移設されました。ピアノのやわらかな佇まいは歴史館の建物によく馴染み、来館者の目を楽しませています。



歴史館に設置されたピアノ

調査の環境が整ったことによりこのピアノの製造番号「1522」が確認され、推測の域をでなかった由緒が明らかになりました。すなわち、明治35（1902）年に日本楽器製造株式会社（現ヤマハ株式会社、以下ヤマハ）が製造し、翌年の第5回内国勸業博覧会に出品したものを昭憲皇太后（明治天皇妃）が購入し、貞明皇后（大正天皇妃）に贈ったピアノであることが確認できたのです。令和4年の文化財指定は、製造から奇しくも120年後のタイミングでした。

ところで、このピアノの文化財指定と修理計画については、音楽学・楽器学の研究者、製造業者であるヤマハとその関係者、漆芸修理の専門家をはじめ、ピアノの技術者、修復家など、多岐にわたる分野の専門家が、知見と情熱をもって関わっています。一見ただけでは分かりにくいのですが、外装部、内部共に経年による劣化が著しく、人間でいうところの満身創痍

といった状態です。明治期の楽器を文化財として修理するという課題を前に、修理の方向性や方法、そして修理後の活用のあり方などについて、何度も議論を重ねてきました。

楽器の修理といえば、音色を取り戻してきれいな状態にするもの、と思われるかもしれませんが、このピアノの場合、そのためには部品を大幅に取り換えなければなりません。そうするとピアノの内部構造や部品の形状・材質など、当初の情報が失われてしまいます。またこのピアノの特徴の一つである漆塗りの外装も、現代の化学塗料を上塗りして輝かせることはできますが、それにより国産最初期のピアノは漆塗りだった、という歴史が一つ失われてしまいます。そのような議論の中で共有された指針は、文化財修理の原則である現状保存修理でした。クリーニングを行い、維持に支障をきたさない限り当初の部品・部材は変えず、損傷している箇所を補修し、補強と保全を行うものです。外装部は東京藝術大学の保存修復工芸研究室に、内部はヤマハに委託し、各工程において両者と港区が協議しながら修理を進める、という形で行われることとなります。

ピアノ産業黎明期の国産グランドピアノが後世の大幅な改変を加えられずに現存している、その稀少性ははかり知れません。その価値を後世に守り伝えるための修理は、今年度から2年間の予定で行われます。当館でご覧いただけるのは令和6年7月17日まで、戻ってくるのは令和8年3月の予定です。折に触れ、修理の進捗状況や得られた知見などを紹介していきたいと思えます。それまでの間、楽しみにお待ちしております。



専門家による調査の様子



港区立郷土歴史館

## 歴史館だより

## お好み裂とその図案について

神谷 蘭  
(学芸員)

令和5(2023)年に開催した特別展「ある図案家の仕事—宮中の染織デザイン—」(10月14日(土)~12月10日(日))では、港区に長年居住した図案家・中山宜一が作成した図案帖『國華』(当館蔵)を中心に、彼が手掛けた宮中の染織品にかかわる図案の数々を紹介しました。『國華』の内容は貞明皇后(大正天皇妃)・香淳皇后(昭和天皇妃)のお召し物や室内装飾など多岐にわたりますが、とりわけ数が多いのがお好み裂にかかわる図案です。お好み裂とは宮中における贈答品のひとつで、天皇・皇后のお好みの図柄を反映させた紋織物です。女官や宮内省嘱託を勤めた人物の記録によると、新年に新調した裂地はまず机掛けなどとして用いられ、残りの裂で巾着などの小物を作り、皇族や側近へ下賜したそうです。この伝統は世の中の変遷にしたがい種類も減り、昭和14(1939)年にとりやめられます。戦後は洋服地として紋織物がわずかに生産され、皇族や諸外国貴顕への贈り物に活用されたといえます。このような背景から現存例は多くありません。しかし、中山が図案の仕事の委嘱を受けた宮内省御用達の高島屋呉服店(現(株)高島屋)には、貞明皇后のお好み裂地帖(高島屋史料館蔵)が非常に綺麗な状態で残されており、貴重な資料として本展示で初公開しました。



写真1 御好裂 各種模様図面



写真2 夕顔の図案

さて、天皇・皇后のお好みはどのように具現化されたのか、ここに中山のような図案家のはたらきがありました。

『國華』の中に「御好裂 各種模様図面」と記された着彩の図案(写真1)があります。ここには24種の図案が描かれており、主題は花鳥、虫などさまざまです。続くページにはこれらの下書きと思われる図など中山の試行錯誤の過程を見ることができると、着彩の図案は実際にお好み裂の図案として採用された24種を描いたものだと考えられます。中山は自身の仕事の記録のためにも、このような「完成予想図」といえるものを残したのかもしれませんが。

この24種の中に夕顔の図案(写真2)があります。背景は市松模様で、3輪の夕顔が咲く様子が左下に配された愛らしい図です。このたび展示をご覧になった方から、この夕顔の図案と一致する端裂(写真3)をお持ちのご連絡をいただきました。実見したところ、花や葉の向き、背景色など相違はあるものの、まさしく中山の夕顔の図案と一致することが確認できたのです。この端裂は貞明皇后と縁戚関係にある宮家に伝わったもので、裂地を拝領したのち、何らかの小物に仕立てた残りを大切に取置いたものと考えられます。中山の図案と実際の裂地の一致、そしてお好み裂の利用の痕跡を知ることのできる、とても貴重で嬉しい発見でした。



写真3-1 端裂(部分)



写真3-2 端裂(全体)

## 参考文献

- ・永井如雲『御好裂に就て』『染織之流行』第18巻新年号 菱山相互会 昭和11(1936)年
- ・山川三千子『女官』実業之日本社 昭和35(1960)年